

川原白滝棚田保存会 (いなべ市北勢町川原)

オーナー中心で「棚田復活」

里の概要

いなべ市北勢町川原は三重県の最北端、養老山脈の中腹に位置する。川原地区の人口 554 人、耕地面積約 38ha の集落である。

川原白滝棚田は川原集落から約 2 km 離れた場所にあり、江戸時代に開田した大小 200 枚からなる 3ha の棚田がある。

里づくりのきっかけ

役場の担当者は、以前転作確認でこの地に入ったとき、「このすばらしい環境の中にある棚田を何とか復活できないか」と考えたそう。当時、この一連の棚田は 3ha のうち 40a を残して耕作放棄地になっており、笹と葛に覆われていた。

平成 13 年度から川原地区が中山間地域等直接支払い事業に取り組むこととなり、コスモス作付けの計画を立てた。しかし、地区が役場や県と協議を重ねる中で、先祖が苦勞して切り開いた田をつぶしてしまいたくない、地域の資産である棚田を復活させたい、との思いを抱くに至った。そこで、地元有志 8 名が棚田保存会を発足させ、棚田復活の検討がはじまった。地区の農業者だけでは棚田を復活させ、維持していくのは困難なことから、棚田やその周辺の自然環境は員弁川水系の水源維持に重要な役割を果たしているとの観点から、広くオーナーを募集することになった。

新聞に記事が掲載され、大きな反響があったものの、役場担当者も保存会役員もこんな荒れ果てた棚田の復元ができるだろうか、オーナーが来てくれるだろうか、と不安があったそう。とにかく、棚田の現状を觀てもらおうと、平成 13 年 11 月に棚田参観日を設け、その参加者の中から初年度 15 組のオーナーが誕生した。

里づくりの経過

平成 13 年 7 月	地元農家による棚田保存会発足
平成 13 年 11 月	棚田参観日を開催して、オーナーの募集を開始
平成 14 年 4 月	初のオーナー会議開催。開墾がスタート
平成 14 年 11 月	収穫祭を開催し、都市住民との交流を始める。
平成 15 年	無農薬での米作りに挑戦
平成 16 年	遊歩道とビオトープの整備。棚田産の酒米で純米酒作りを始める
平成 17 年	ブルーベリーなどの果樹を植樹
平成 18 年	棚田ブランド米のオリジナル米袋作成。棚田の復元は約 80 枚、2ha に。

現在の活動

■ 棚田の保全活動

田の一枚一枚は小さいため、大きな機械は入らない。農家で使われなくなった耕耘機やバインダー、コンバインなどの農機具を集めて使えるよう整備したり、少しずつ棚田を復元したり、一年を通じて作業をしている。作付けする作目も、オーナーがアイデアを出し合っているいろいろな品種に挑戦。ヒノヒカリをはじめ紫米などの古代米や、酒米、レンコン、マコモ、そばなどを減農

葉・無農薬で栽培している。酒米はオーナー自ら酒造会社と交渉し、オーナーも酒造りの作業にかかりながら“川原白滝鈴麗酒”を造った。休憩する小屋や作業舎、農機具庫などもすべて廃材などを使ってオーナーと地元役員の手作りで作り上げている。



活動のポイント

■ オーナー主体の活動

お客様としてのオーナーではなく、自ら活動主体となり、荒れた水田を少しずつ切り開き、田植えや収穫などの作業をしている。そして、その活動を地元役員や市が支援する形をとっている。オーナーは自分たちが話し合って活動方針を決めていき、会長も規約もない自由な雰囲気の中で活動をしている。それができるのも、地元役員と市、オーナーが「棚田を復活させ、安全でおいしい米を作る」という目的を共有しているからこそ。オーナーはいろんなアイデアを出し合い、市や地元役員が裏から支え続けアイデアを実現することで、どんどん新しい取り組みが生まれている。オーナーにやりがいのある農業を提供するこのシステムで、多い人で年間 100 日以上、ほとんどのオーナーが 40 日以上この棚田を訪れ、作業をしている。

苦労話

当初、荒れた棚田を借りるため保存会代表が土地所有者と土地利用権設定を結んでスタートした。しかし、中には地主の理解を得られず借りることができない場所もあった。オーナーたちは直接地主に交渉し、その熱意が通じてやっと借りることができた場所もあった。

また、四方が山に囲まれた場所であるため、サル、イノシシ、シカの被害が多く、はざかけした稲が被害にあい減収に至ったり、せっかく復田した農地が駄目になったりと、電気柵での被害防止も限界で対策に苦慮している。

さらに、棚田を復活させようという強い意志を持った地元リーダーの存在が不可欠となっているが、地元との仲介役、オーナーのバックアップなどその負担は大きくなっている。

将来の展望

炭窯やおくどさんを作る計画もすでにあり、これからもオーナーのアイデアで新しい取り組みに積極的に挑戦していく。

地元や市はそれを支え続け、「本物の、いいものを作り食べる」「イベントではなく本当に農業を楽しみたい人が棚田保存に取り組む」ことを共通の目的として活動を続けていきたい。

連絡先

いなべ市役所 農林商工部

電話：0594-46-6306

城山クラインガルテン（津市美杉町太郎生）

住民主体で「人と人との交流」

里の概要

津市美杉町太郎生地区は三重県の中部に位置する中山間地域である。奈良県との県境・俱留尊山の麓にあり、雲出川流域とは水系の異なる淀川水系の名張川流域に属している。名張市へ車で30分ほどの距離にあることから、生活・経済面で名張市との結びつきが強い地区である。

城山クラインガルテンは地元農家9軒で組織する農業生産法人・美杉俱留尊高原農場が経営している滞在型体験農園。ラウベ（休憩施設）付き農園が27区画あり、契約者は週末などを利用して滞在しながら農作業体験ができる。

里づくりのきっかけ

クラインガルテンの立つ場所は、山と山に囲まれており、土地条件が悪く圃場整備もされていない場所だった。太郎生寺脇地区の中でも最奥部にあったこともあり、平成2年頃には約1haが耕作放棄地となっていた。しかし耕作放棄地が獣のすみかとなり、里への被害が増大するにつれて「耕作放棄地を何とかしてほしい」との声が自治会に寄せられた。そこで遊休農地解消のため地元自治会は旧美杉村役場等と検討を重ねた。俱留尊山への登山客がこの地域に多く訪れることから、都市住民の利用を見込み、クラインガルテンの建設を決定した。

里づくりの経過

平成7年	地元自治会にて活用法の検討
平成8年	農家9戸で農業生産法人（有）美杉俱留尊高原農場を設立
平成8年	山村振興等農林漁業特別対策事業による整備を着手
平成10年	施設の利用開始
平成15年	炭焼き、陶芸教室を始める

現在の活動

■ 農作業体験

施設は一年契約で、利用者は年間を通じて農作物や花卉類の栽培を楽しんでいる。農作業に慣れない利用者には、社員の9名が農作業指導をしている。オープンから9年余り経った今、むしろ指導の中心は継続利用者の方たちのよう。それだけではなく、法面など周囲の草刈も山菜採りを楽しみながら、利用者が進んで引き受けてくれている。

■ 季節ごとのイベント

- クラインガルテンオープン記念イベント（5月）
- 夏祭り・盆踊り（8月） ○ 収穫祭（9月） ○ 餅つき（12月）

盆踊りでは、クラインガルテン利用者が阿波踊りや郡上踊りなどを披露することもある。地域住民も参加して大いに盛り上がる。

■ 炭焼き、陶芸教室

隣接の農村公園にある炭焼窯で竹炭、木炭を焼いています。材料となる木は周囲の山から切り出している。手入れのできない山の木を伐採してもらえるとということで、山の持ち主からも好評。

また、クラインガルテンの元利用者（現在は地域へ定住）が講師となって陶芸教室も開催。農園利用だけでなく、多彩な楽しみが体験できるのも城山クラインガルテンが人気の理由である。

活動のポイント

■ 利用者の積極的な活動

イベントの企画・準備は当初、管理者側が行っていたが、数年前からすべてクラインガルテン利用者が行っている。炭焼き・陶芸教室も利用者同士が話し合って実行している。これらの活動を通じて利用者同士が親密な関係を築き、本当の“田舎のお隣さん”のよう。

■ 人と人との交流

利用者同士だけでなく、地域住民との交流も活発に行われている。代表の井上さんによると、太郎生地区は名張方面へ通勤する人が多いためか、余所者を受け入れる雰囲気があるという。地域の方は、クラインガルテンに遊びに来て、クラインガルテン利用者は地元の水田で農業体験をしたり、山へ木を切りに行ったりとクラインガルテン内だけにとどまらず、地域へ出かけていく。クラインガルテンが地域から孤立しておらず、自然な交流が続いている。

■ （有）美杉倶留尊高原農場の細やかな管理

敷地外側の草刈、施設の修繕、台風など非常時の管理等きめ細かなサービスを行っている。クラインガルテンを不在にすることが多い利用者にとって安心できるサービス。施設の維持管理等については毎週一回社員ミーティングが行われ、皆がクラインガルテンの運営に積極的に参加している。



苦労話

クラインガルテンをはじめた当時は知名度がなく、お金をかけずに情報発信しなければならなかった。記事にしてもらうよう、とにかくたくさん新聞社・テレビ局・ラジオ局を回った。

将来の展望

もっと多くのお客様に利用してもらえるよう、区画を増やしていきたい。

連絡先

（有）美杉倶留尊高原農場

住所：〒515-3536 津市美杉町太郎生 1893-2

電話：059-273-0770

URL：<http://www.ztv.ne.jp/kuroso/>

(財) 紀和町ふるさと公社 (熊野市 (紀和町))

千枚田の保全と新しい特産品の開発で地域活性化

里の概要

紀和町は、三重県南西部に位置し、約 89%が山林を占める山村の町。昭和 9 年の銅鉱山開発以来、発展を続けたが、昭和 53 年の閉山以降、昭和 30 年に 1 万人近くあった人口は H17 年には 1,623 人まで減少。また、高齢化率が 53.2% (H16 年度) と高いのが特徴である。

鉱山閉山後は観光誘客に力を入れ、巨岩・奇岩・断崖が続く渓谷の瀨峡や、湯の口温泉、入鹿温泉及び日本一とも言われる丸山千枚田等の資源を活かして取組んできた。H17 年 11 月に旧熊野市と合併し、熊野市紀和町となった。

里づくりのきっかけ

銅鉱山の閉山後、町は豊かな自然や温泉を活用した観光誘客や地域特産物の加工品開発の取組みを始めた。そんな中、味噌・高菜・山菜・梅干等の加工食品や雉の飼育・食肉加工及び放鳥の事業等の業務を抱合する組織として、また、町の歴史的・文化的景観である丸山千枚田の復田及び維持管理作業を担う組織として H5 年 4 月に (財) 紀和町ふるさと公社が設立された。

里づくりの経過

H5. 4	(財) 紀和町ふるさと公社設立
〃	加工事業・雉育成・加工・販売・放鳥事業継承
H5. 10	丸山千枚田復田作業開始
H6. 3	丸山千枚田条例制定 (旧紀和町)
H6	第 1 回田植え祭り、第 1 回稲刈りの集い
H8	オーナー制度発足
H9	復田達成。千枚田荘オープン
H11	丸山千枚田を守る会発足、千枚田オートキャンプ場オープン
H11. 9	紀和町において第 5 回全国棚田 (千枚田) サミット開催
H12	ふれあい市場千枚田 (直売所) オープン
H17	ワーキングホリデー制度の試験・検証を開始

現在の活動

① 丸山千枚田維持保全活動

- ・千枚田オーナー制度
(3 万円/1 口、H18 オーナー 133 口)
- ・千枚田を守る会
(1 万円/1 口、H18 申込 85 口)
- ・田植・稲刈イベント運営
- ・千枚田米の販売



② 農産物加工・販売事業（味噌、梅）

味噌は国産の米、大豆、塩だけを原料とし、添加物や保存料を一切使わない素朴な味。梅干しは、町内の農家の梅の木から収穫。消毒と化学肥料の施用を控えた自然に近い梅で、形や大きさにばらつきがあるものの、純粋にシソの風味だけが漂う美味しい梅干しに仕上げている。



③ 雉の飼育、雉肉加工・販売、放鳥事業

野外飼育場で飼育された雉は脂身が少なく好評。市内の旅館や日本料理店の他、市外県外に出荷。またH17年度から個人向けサイズのパックの販売も開始した。他にはない特産品づくりとして、旧紀和町時代から取組んでおり、最近では市内の旅館・飲食業者の名物料理として、観光業との連携を図っている。

④ 千枚田オートキャンプ場管理・運営

活動のポイント

千枚田オーナー制度、千枚田を守る会は、千枚田の保存経費を確保するだけでなく、地元住民と都市住民の交流、農耕文化の継承、丸山千枚田及び紀和町の情報発信等の機能を担っており、当地域の振興に大きく寄与している。

農産物加工は地元農産物の有効活用、高付加価値化が図られ、農産物価格が低迷する中、地域の農業振興に寄与しています。また地元住民の働く場所の創出という効果も出ている。

苦労話

平成5年から復田を開始し、平成9年に約800枚の田を復田しているが、草や木が生えた田を元の状態に復田するには、相当な労力・経費がかかった。また、1340枚もの田圃の維持管理に、復田当初は予想もしなかった労力が必要となっている。また、作付けを行っても獣害による被害で作っても収穫できないなどの苦労もある。オーナー田を被害から守るため、お盆明けから9月末までは爆竹を鳴らすなど夜遅くまで毎日夜警をする日々が続いた。

農産物加工に関しては、手作りと材料にこだわっているため味を保つのが難しく気を使う。特に味噌造りに使う麴（こうじ）は生き物なので、出来るだけ手で触れて確かめながら作っている。

雉に関しては飼育方法に関する資料が十分に無く、特に換気のタイミングを判断するのが難しかった。今では経験的に判断していますが、天候が不安定な時期には気を使う。

将来の展望

丸山千枚田に関しては、管理作業を担っている保存会メンバーの平均年齢が70歳近くになっているが、後継者確保の目途が立っていない。そこでH17年度から補助事業を活用し、将来の労働力確保等を目的に、大学生を対象としてワーキングホリデー制度の試験及び検証を開始。経費面等の課題が残っており、現在制度の定着化について検証している。また、これ以外にもボランティアの活用についても検討し、町内外の方の協力を得て、労働力の確保と経費削減する仕組みづくりを考えている。

雉肉については市や市内の旅館・飲食業者と連携し、名物料理として定着させるべく取組んでいく。

連絡先

(財) 紀和町ふるさと公社

住所：〒519-5405 三重県熊野市紀和町丸山 255 の 6 電話：05979-7-0640

URL：<http://www.za.ztv.ne.jp/furusato/index.html>